

C-63 室町時代の衣服の遺品類の縫製について、(第1報)

福島大教育、

栗原澄子

目的 熊野速玉大社・熱田神宮の遺品により、室町時代の衣服製作の方法を究明し、鎌倉時代との相違を明確にしようとした。

方法 室町時代の製作といわれている熊野速玉大社の遺品である唐衣10領・裃18領・薄衣14領ならびにその縫製に用いた針や、ほぼ同時代の製作といわれている熱田神宮の遺品である表着2領・重袷2領・単1領・下襲3領・衣衣のようなもの4領などの実態調査をし、その縫製方法・ぬの地の扱いから、縫製に用いた糸などをそれぞれのグループに分けて、鎌倉時代の製作といわれている鎌倉鶴岡八幡宮の遺品と比較してみた。

結果 室町時代と思われる熊野速玉大社や熱田神宮の平縫いの糸は、粒付けが多くて撚りが少なく、くけ糸・ひねり糸は粒付けが少なく撚りが多い。これにくらべ、鎌倉鶴岡八幡宮のものは平縫い糸・ひねり糸とも同一で粒付けは多いが撚り数は非常に少ない。縫製方法は、熊野速玉大社の唐衣は髪置きのあるものと無いものによって2様に分れるが、総体的にはあまり変化はない。熊野速玉大社の裃は細部の相違から2様に分け、熊野速玉大社の薄衣と熱田神宮のものの大部分はほぼ似通っているが細部の相違から3様に分けられる。鎌倉^{鶴岡}八幡宮の袷類や単は室町時代のものとだいぶ異なりすべての真に古い様式が認められる。また、熱田神宮のものの中の1～2真には鎌倉のものに近いものもあり、4真はずっと時代の降ったものと考えられるものもある。以上のように縫製方法や糸からもほぼ時代の相違と認めることができる。